

法蔵菩薩なる信

飯山 等

仏教一般の立場は、その歩みを、教・信・行・証という次第で展開する。そこでは、信は教を教えとして信ずるところであるにとどまり、問題の重点はその教をいかに実践するかという行のほうにおかれる。そのとき、仏道における信の必須性は、いつのまにか、当然のこと、自明のこととして見做されてしまう。しかし、信ということば、それほど自明なことであり、また、自身に成り立つものなのか。

親鸞は、信は行の前段階ではなく、念仏の前行が私の上に事実として成就した相であることを明確にする。この行信を、「斯行者出於大悲願」(行巻)とおさえ、「斯信即是出於念仏往生之願」(信巻)と明らかにする。本稿では、このようにおさえられる信は、どのようなものとしてその人にはたらくか、また、信を獲ることによってその人はどうなるのかということを考えていきたい。

親鸞は和讃において、この信を、
「信心すなわち一心なり
一心すなわち金剛心
金剛心は菩提心
この心すなわち他力なり」

(浄土高僧和讃・天親讃)

と端的に示している。ここに、信心は金剛心であり、菩提心であること、つまり、不可壊の菩提心であることを明らかにしている。

それは「信巻」においても、真実信に関する経論釈文の引証を『往生要集』の文によって締めくくり、その中に引かれている『華嚴経』入法界品の文によって、信が菩提心であることを明らかにしている。

その文は、菩提心を、不可壊の薬、住水宝珠、金剛石の三つの譬えによって示し、得菩提心の相を「一切の煩惱・諸魔・怨敵・壊ることあたわざるところなり」、「生死海に入りて沈没せず」とのべ、菩提心そのものを「無量劫において生死の中、もろもろの煩惱業に処するに、断滅することあたわず、また損減なし」とのべている。ここに明らかのように、それは、身の事実の外に別立する心ではないし、また、この身の汚濁から逃れようとする、この身に絶望してこの身を捨ててひとり行ってしまう心ではない。決してそうではなく、身の汚濁と一つになって自らを生き、自らの清浄をその汚濁にささげて生きる心である。その汚濁を自らのこととして荷負うのである。身の苦悩に自らを投じて、苦悩の身を荷負わんとする心である。

私の現実とは、どこにも自らを因として定立する可能性を残していない。「いずれの行も及び難き身」(歎異抄)、「無有出離之縁」(観経疏)である。自身は絶対の果でしかない。ただ、この信心のみが、果存在たることを一歩も出れない私を荷負う。次の諸文はそのような信心のすがたを明瞭に示しているように思う。

- 「正定の因はただ信心なり」(正信偈)
- 「大信心は……証大涅槃の真因」(信巻)
- 「涅槃の真因はただ信心をもつてす」(信巻)
- 「一心はすなわち清浄報土の真因なり」(信巻)
- 「報土の真因は信樂を正となす」(化身土巻)

信心が因であるとはどういうことか。それは、私の身の事実を切り捨てることよってなりたつのか。信ひとり涅槃への道を歩むのか。そのような信心にとつて、虚仮不実なる身心は重荷でしなくなる。身軽なひとり旅の足手まといでしかない。そんな厄介なお荷物などさっさと捨ててしまつたほうがどれほど進み易く、また自らの清浄なることを保つことができるかもしれない。しかし、このように身の事実を無視してそこから遠ざかつていく信心は、引つ張られたゴムひもがもとにもどろうとするように、常に現実へ引きもどされる。それでもなおかつ遠ざかるうとすれば、ひもが切れてしまうように、信は決定的に破綻してしまふ。そして、かえつて信は身を責め苛むものでしかなくなる。それは、信でもつて身の事実をも包みこんでしまおうとする観念的な信の免れ難い悲劇である。そこにあるのは、あくまで身を責め苦しめる信か、身の事実への信の壊敗か、そのいずれか一つである。

不可壊の菩提心である信は、身の事実に対する自己中心的な接近・取捨選択をいっさいおこなわない。私のすべてを荷負うのである。そこに必然的に、私の存在性は信にとつて問いとなる。「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鶩、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥すべし、傷むべし、と。」

(信巻)

悲しみに沈むのではない。傷みに迷うのではない。それは結局傲慢な自我の屈折した感情にすぎない。信は、この身の事実を深い傷みとして背負う。それは単なる悲しみ歎きではない。私の心が私の醜態に絶望しているのではない。信の悲しみであり、傷みである。

それゆえ、信が私を荷負するとき、それは必然的に、私を問いとして荷負うこととなる。私にとつて果でしかなかった私の存在性が、信によつて問いとして荷負われるのである。信は、いかなる自己中心的な関心を介在させることなく、私を問う。それは決して対象的・意識的に問うのではない。そこへ自身を投ずることによつてそのすべてを荷負う、そこに問いは必然する。

そして、この問いによつて、信は、「法蔵菩薩の因位の時」、その時に立つのである。法蔵発願の端的に立つ。そしてそこで、法蔵発願の時の自身の事実に出遇う。

「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおほゆるなり。」(歎異抄)

煩惱具足の凡夫、それは私のいまの事実にはかならない。しかし、そのいまは、仏のかねての時、すなわち、法蔵因位の時、その時なのである。信は、いまの私を、仏のかねての時に見出す。そして、いまの私がかねての時の発願の大地にほかならないことを知る。かくのごとくあるわれらのいまの淵源に目覚めるのである。信がその因位の時に立つとき、煩惱具足といううなずきは、その自意識的自覚性を破られ、おおせの開示する事実となる。そのことをもつて、いよいよ自身のいまは深い問いとなる。信においていまが問いとなる、そのときわれらのいまが法蔵因位の時となるのである。信のみが、自らのいまを因位の時とする。信が法蔵志願にふれる。信は、われを場とする法蔵志願の実践者である。法蔵菩薩なる信である。信は身を荷負することによつて、問いとしての身へ回帰するし続けるのである。